

現代の絵本から見る富士山

—富士山は子どもに何を伝えるか

Mt. Fuji considered from a present-day picture book

What does Mt. Fuji hand down to a child?

鈴木 正 和

Masakazu Suzuki

1、はじめに

現代の絵本には、富士山を描いた作品、もしくは富士山を題材として創作された絵本が幾つかある。特に、一九九〇年代以降では、富士山はさまざまなかたちで絵本の中に描かれているように思われる。また、富士山が二〇一三年六月に世界文化遺産に登録されたことから、富士山に対する注目度はますます高まっていく傾向にある。具体的に、富士山は、どのように絵本の中に描かれているのか。富士山の絵本が子どもたちに伝えようとしている問題とは何か。本稿では、富士山を題材にした近年の絵本を紹介すると共に、その内容に即して分類し、個々の富士山に関する絵本の特色を明らかにすることを試みたい。

そこで、本格的な絵本に触れる前に、まず初めに紹介したいのは、「毎日こどもしんぶん」（毎日新聞社）に、一九七七年七月九日から一九七九年三月一七日にかけて連載された谷川俊太郎の詩を集めた、詩集絵本『ふじさんとおひさま』（童話屋、一九九四年一月、たにかわしゅんたろう・詩、さのようこ・画）である。文庫本を少し大きくした程度の手のひらサイズの小柄な体裁の本には、谷川の四四篇のひらがな表記の詩が収録され、その巻頭には次の詩が掲載されている。

ふじさんとおひさま

ふじさんは おおきい おおきいから しずかだ
ふじさんを みると ころも しずかに なる

おひさまは あかるい あかるいから あたらしい
おひさまが のぼると ころも あたらしく なる

「ふじさん」と「おひさま」は対になり、「ふじさん」の大きさ、「おひさま」の明るさは、それを読む者に、静かな「ころ」と新しい「ころ」をもたらす。富士山が日本一の大きな山であり、

太陽が明るく暖かい日差しを降り注いでいることは、多くの人には周知のことである。しかし、視界に映る目の前の富士山の静かさと太陽の新しさは、「おおきいから しずかだ」「あかるいから あたらしい」という谷川の詩の言葉によって、初めて読者の心に入り込んでくるものである。大きいから静かだ、明るいから新しいとする「ふじさん」と「おひさま」の説明は、決して論理による実証的な説明ではなく、詩の言葉そのものが創り出した新たな世界観の提示である。言い換えるならば、この詩を語る語り手にとって、「ふじさん」は「おおきい」がゆえに「しずか」な存在となり、その大きな「しずか」さが、富士山を見る語り手の「ところ」を静めてくれている。あるいは、「おひさま」が昇るたびに、日の光の明るさは語り手の「ところ」を照らし、その明るさが語り手に新たな生命の息吹を吹き込む。つまりは、子どもの読者を対象に創られた詩集の中の富士山は、詩の言葉によって、既存の富士山の象を覆し、それを読む子どもの心を落ち着かせ、新しくなった太陽の光は、子どもの心に新たな生命の力をもたらすのである。

「ふじさん」と擬人化された「おひさま」の表紙（絵・佐野洋子）から成る、谷川俊太郎のこの小さな詩集絵本には、詩の言葉を通して、読み手の既存のものの見方が壊され、言葉による新たな世界観を表現する力に満ちている。この詩集の中で、富士山が素材となっている詩は、この巻頭の「ふじさんとおひさま」のみではあるが、静かで新しい「ところ」を子どもたちに、乃至は読み手に喚起させるのが、詩の言葉であり、絵本作家でもある谷川俊太郎と佐野洋子の絵本なのである。

では、絵本の中の言葉、絵本が描き出す富士山は、子どもたちや読み手に何を伝えようとしているのか。近年の富士山を題材にした絵本を大きなカテゴリーで分類するならば、それは次の（A）～（D）のような分類が可能となるように思われる。

（A）富士山を擬人化したお話（物語）を通して、心のあたたかさ、やさしさ、包み込むような愛情、力強さ等を、読み手の子どもたちに語り伝えようとする絵本。

①みやにしたつや『ふじさんファミリー』（金の星社、二〇一二年二月）

②丸山誠司『ふじさんです』（教育画劇、二〇一一年一二月）

③しばはら・ち『やまのすもうだ！はっけよい！』（鈴木出版、二〇一三年一二月）

（B）歴史的・科学的な見地から富士山を考察し、お話を通して、富士山の自然や環境破壊の問題に警鐘を鳴らす等、富士山の問題を提示することを試みた絵本。

④かこさとし『富士山大ばくはつ』（小峰書店、一九九九年六月）

⑤やなぎはらまさこ『富士山とひめねずみのチロ』（PHP研究所、二〇〇〇年一二月）

(C) 四季折々で、様々な表情を見せる富士山の美しさ、そこに棲む動物や植物のこと、富士山にのぼることで見えてくるもの等を伝えようとする絵本。

⑥文・菅原久夫、絵・岡部一彦『富士山にのぼる』（福音館書店、一九八七年六月）

⑦石川直樹『富士山にのぼる』（教育画劇、二〇〇九年十一月）

⑧三上葉『トムとジェリーのたびのえほん・日本 富士山にのぼる』（河出書房新社、二〇一三年八月）

(D) 富士山をモチーフにしながら、日本語の言葉の美しさや、言葉そのものの持つ力を伝えようとする絵本。子どもたちを含めて、詩や短歌を愛し、絵本を愛する人々に向けて創作された絵本。

⑨詩・谷川俊太郎／絵・佐野洋子『ふじさんとおひさま』（童話屋、一九九四年一月）

⑩短歌・文 俵万智／絵 U・G・サトー『富士山うたごよみ』（福音館書店、二〇一二年二月）

もちろん、ここで取り上げた十冊の絵本は、必ずしも（A）～（D）のいずれかの分類のみに収まるわけではなく、他の分類にも通じる場合もある。また、取り上げた以外にも、富士山に関わる絵本は出版されているが、本稿では、主に一九九〇年代以降に出版された絵本を取り上げた。以下、この分類に即して、それぞれの絵本について考察してみたい。

2、富士山を擬人化したお話の絵本

まず、（A）に分類した、富士山を擬人化したお話（物語）の絵本であるが、みやにしたつや『ふじさんファミリー』、丸山誠司『ふじさんです』、しばはら・ち『やまのすもうだ！はっけよい！』を取り上げる。この三冊の絵本に登場する富士山は、いずれもひとところに止まって聳え立つ山ではなく、人間と同じように、目を開き、言葉を話し、手足を伴って身体が動くキャラクターとしての「ふじさん」である。この擬人化された「ふじさん」を描いた三冊の絵本が、丸山（二〇一一年）、みやにし（二〇一二年）、しばはら（二〇一三年）によって、三年に亘り、続けて出版されたことは興味深い。

『おとうさんはウルトラマン』（学習研究社、一九九六年五月）などの「ウルトラマン」シリーズ、『おまえうまそうだな』（ポプラ社、二〇〇三年三月）などの「ティラノサウルス」シリーズを初めとする絵本で、既に絶大な人気を得ている静岡出身の絵本作家・宮西達也（みやにしたつや）であるが、みやにしの『ふじさんファミリー』は、どのような絵本なのか。

この絵本に登場する家族は、日本一の「ふじパパ」、日本一の「ふじママ」、そして「ふじさんし

ろう」の名前を持つ主人公の「ぼく」、お話の中で生まれる妹の「あかちゃん」である。お話は、妹が生まれたことで、育児の忙しさに疲れている「ふじママ」に、かまってもらえなくなった「さんしろう」の姿を中心に展開する。「あかちゃん」が生まれたら「日本一のおにいちゃんになるんだよ」と「ふじパパ」に言われた「さんしろう」は、期待に胸を膨らませていたものの、実際に妹が生まれた後には、近所の「やまたち」も「あかちゃん」のことばかりを可愛がり、「さんしろう」は「すこーし かなしく」なる。「ふじママ」も、「あかちゃん」をあやしたり寝かせたりミルクを飲ませたりで、くたくたになり、「さんしろう」の淋しくなった気持ちに気づくことができず、「さんしろう」を大声で怒鳴ってしまう。何度か叱られた「さんしろう」は、泣きながら飛び出してしまう。

「ふじパパ」が帰ってきた夜になっても、「さんしろう」は戻らず、パパとママは「かぬきやまのおじさん」に事の顛末を伝える。その後は、「まわりのやまたち」も協力して、皆で「さんしろう」を捜しに出かける展開となり、草むらの中で泣きながら寝入ってしまった「さんしろう」を発見する。無事に「さんしろう」を見つけることができた「かぬきやまのおじさん」は、「これからは みんなで さんしろうとあかちゃんをそだてていこう」「わたしたちは ふじママのみかただからね」と述べる。それを受けて、「ふじパパ」は、「みなさん ありがとうございます。これからは ぼくも こそだて がんばります」と告げるのである。

つまりは、『ふじさんファミリー』が描き出しているのは、妹や弟ができたことによって母親を独占されてしまうと感じる子どものせつなさであり、育児に忙殺される母親の苦しみである。また、そうした母親と子どもの気持ちを受けとめ、地域の人々が一体となって子育てに参加することへの指針であり、父親が育児に参加することの必要性なのである。したがって、『ふじさんファミリー』は、地域が一体となって子育てを支援していこうとする意識と社会の可能性を示唆した絵本であるといえよう。子育ては、密閉された空間で母親のみが行なうのではなく、父親との協働によって、そして地域社会の支援によって、今後は推し進めていくことの重要性が説かれているのである。その意味で、この絵本は、子育てと家族、子育てと地域社会の問題こそが、今日の日本の問題であることを表現しながらも、富士山を家族に見立てることで、子どもにとっても大人にとっても楽しめる愛情深い絵本となっている。

丸山誠司『ふじさんです』は、人々に見られる存在としての擬人化された富士山が、迫力のあるユーモラスなタッチで描かれる。「ふじさん」の「わたし」は、「おおむかし」にはよくしゃべり、「らくご」をして「みんな」を笑わせたり、「すもう」を取ったり、夜空の「ほし」を取っては「たんじょうびプレゼント」にしたり、皆の人気者であり、「ふじさん」の「わたし」の絵を描く人が「いっぱい」いた。皆が絵を描くので、「ふじさん」は出掛けることもできず、じっとしているうちに、いつの間にかぐっすりと寝入ってしまう。

絵本では、「やまねこおやこ」と「やまどりおやこ」が起しに来て、目を覚ましたとあるが、眠っている間に数百年の年月が流れており、文明が栄えて、周囲の風景が様変わりしている様子を見た「ふじさん」は「びっくり」する。絵本の絵は、恐竜や野生の動物、平安時代や江戸時代の装束を

思わせる人々がいた時代から、文明が栄え、飛行機や新幹線が自明のものとしてあり、携帯電話で「わたし」を撮影する人々がいる現代の時代へと一挙に移動する。豪快なタッチの「ふじさん」は、目覚めた後には「しんかんせん」や「ひこうき」、「ロケット」にも乗って、はしゃぎ回り、しゃべっている様子が描かれている。時代が変わり、社会や文化の様子が変わっても、「ふじさん」は「ドシーン」とした存在としてあり、変わらないものとして、絵に描かれ続けることが最後に記されている。

丸山の『ふじさんです』は、何よりも絵のタッチに迫力があり、スピード感に満ちていて、ページをめくる楽しさに駆られるような絵本である。同時に、幾年の時間が流れ、時代が移り進んでも、人々の心を捉えて愛され続ける「ふじさん」の姿がほのぼのと描かれているのが、この絵本の特徴といえるだろう。

丸山の描く「ふじさん」にも、相撲を取る姿が描かれていたが、日本一の横綱・富士山に九州の桜島が挑み、日本の国技としての相撲が擬人化された富士山によって展開されていくのが、しばらはら・ち『やまのすもうだ！はっけよい！』の絵本である。「むかし むかしの おおむかし、にほんの やまたちは ときどき すもうをとっていた」で始まる絵本は、「さくらじま」と「ふじさん」が相撲を取るべく、「せきがはら」の「どひょう」を目指して進んでいき、一番勝負をするまでが描かれる。「ちいさなやま」だが、鍛えた技を試そうと、意気揚々と九州から海を渡って闘いに挑む「さくらじま」の姿は勇ましい。また、それを受けて立つ「ふじさん」の大きな体が歩む姿も、力強くどっしりとした安定感があり、たくましい魅力で読み手をひきつける。

「ふじさん」と「さくらじま」は、果たしてどのような相撲を見せてくれるのか。絵本の中では、小柄に見える「さくらじま」が、どこまで大柄の「ふじさん」に対抗することができるのか。絵本の左画面で、「さくらじま」は「とんと」すばやくしこをふみ、右画面では、「ふじさん」が「どすんと」しこをふむ。「さくらじま」は、つかんだしおを「ぎば一つと たかだかと」なげあげ、「ふじさん」は、「ばら ばら ばらと みずを まくように」ふりまく。両者のしぐさや動作は対照的に描かれ、両者を見守る「やまたち」はどよめき、期待感が増す。読み手の子どもたちも、ページをめくるごとにハラハラドキドキし、固唾を呑みながら、勝負のゆくえを見守ることになる。

「みあって、みあって、はっけよーい…のこった！」の行事の「いぶきやま」の「ぐんばい」がかえると、「ふじさん」は「うりゃー」と声をあげながら、一気に前に出て突進していく。「さくらじま」は押し出されてしまうかと思いきや、「ひらり」と突進を交わし、すばやく「ふじさん」の後ろに回りこむ。背後の「さくらじま」を押し出そうとする「ふじさん」。回しをつかみ、ありったけの力で「ふじさん」をもちあげようとする「さくらじま」。「ふじさん」が体を揺り動かすと、「しょうぶ あったー。ふじさんの かちー」の判定が下る。「ふじさん」の体を持ち上げ、運ぼうとした時に、「さくらじま」の足が「どひょうのそと」に出てしまったのだ。「さくらじま」は悔しがるものの、周囲の山々の観衆は歓声を上げ、両者を褒め称える。「ふじさん」は、相手のすばやい動きと腕の力を褒め、「さくらじま」は、さらに自らを鍛えて次回も挑戦することを誓う。絵本の末尾は、「てに あせ にぎる やまの すもう、つぎの すもうが たのしみですね。」という

語り手の言葉で終えられている。

この絵本は、富士山が世界文化遺産に登録された直後に出版されているが、日本古来の神事や祭りであり、礼儀を重視する武芸・武道でもある相撲の魅力をも、子どもたちに伝える役割を果たしていると思われる。富士山と桜島を相撲取りに見立てることで、日ごろから自分の技と腕を磨き、正々堂々と闘いに挑む「さくらじま」の姿は清々しいものがある。また、小柄な相手ではあっても、決して見下すことなく、正々堂々と受けて立つ「ふじさん」の威厳ある姿は、憧れのキャラクターとして、絵本を読む子どもたちにも感受されることと思われる。

したがって、『ふじさんファミリー』、『ふじさんです！』、『やまのすもうだ！はっけよい！』の三冊の絵本は、富士山をキャラクター化し物語にすることで、現代社会が失いかけているものを呼び戻し、家族愛の大切さや時を経ても変わらないもの、誠実に相手と向き合うことの清々しさ、そして何よりもそれぞれのユーモラスな絵のタッチが、子どもたちに絵本の持つ魅力を存分に伝えてくれるものとなっている。それは、富士山を素材としながらも、実際には絵とお話（物語）の力を通して、人としての心のあたたかさや優しさ、本当の愛情や力強さを、子どもたちが読み取ってくれることを願っている絵本のように思われる。その意味で、富士山を擬人化したこれ等の三冊の絵本は、富士山の雄大なイメージを活用することで、虚構のお話そのものを子どもたちが楽しむための絵本であるといえるだろう。

3、富士山の自然環境や火山噴火の問題を描いた絵本

一方で、富士山を擬人化して描くのではなく、実際の富士山の問題を提示することを目的とした絵本が（B）の分類の絵本である。

やなぎはらまさこ『富士山とひめねずみのチロ』は、富士山を舞台としたお話の絵本ではあるが、富士山を訪れた観光客等が残していったゴミが、富士山の森の自然環境を徐々に汚しつつある現状を憂い、「ひめねずみのチロ」と「ツグミくん」の目を通して、警告を発する絵本となっている。

富士山の「すそのもりのなか」に棲む「チロ」は、「あかまつのとっぺん」から見る富士山の大きさ、美しさ、ゆったりとした姿で「ここをゆうきづけて」くれる富士山に登ることにあこがれていた。しかし、渡り鳥の「ツグミくん」と一緒に富士山の森の中を進んでいくと、ポイ捨てされた空き缶に右足がはまってしまい、「しくしく」と泣いていた「うさぎさん」に出会う。チロはうさぎを助けてあげるが、さらにその先に進んでいくと、「たばこのすいがらや あきカン おかしのふくろ」が散らばって捨ててある森の中の様子に出くわす。「かもしかのおじさん」の話では、上に行けば行くほど、富士山の森の中はゴミが捨てられていて酷い状態だという。焚き火をした後の火の不始末、散らかった「どくきのこ」。あちこちにゴミが捨ててあることを喜ぶ「からすたち」の歌声までが聞こえる。

チロがこれまでながめていた美しくも堂々とした富士山。夏は夕日に照らされ、冬は青い空に白い雪が積もった「にほんいち かっこいい山」と思っていた富士山。その森の中がゴミに汚されて

いることを知ったチロの「こころ」は、「ちくちく」と痛み、さらに前には進めなくなってしまう。「トラックで はこばれた ゴミの山」の近くでは、たぬきときつねが寒そうにしながら、雪が積もれば、「きたなくてきけんなゴミ」が隠れるけれど、春になれば「また ゴミの山と ごたいめんだ」との会話を交わしている。いつの間に、富士山は、これ程にゴミが多くなってしまったのか。チロは悲しみの余り、泣き出してしまう。

その夜、チロは富士山とお話をする夢を見る。「ねえ 富士さん。富士は にほんいち たかい山 だよ」「そうだよ。にほんいちさ」「ねえ ねえ 富士さん。ほんとうは にほんいち きれいな山 だよ」「……………」春を迎えると、ツグミはチロに別れを告げて、北へ帰っていったが、秋にまた来る時には、ゴミのない富士山になっていることを願うことで、お話は終わられている。夢の中で、チロの問いかけに沈黙し、応えることができなかった富士山の言葉を紡ぎだすために、この絵本は創作されたといっても良い。NPO法人「富士山クラブ」会員でもある作者の柳原雅子氏は、『『あとがき』にかえて』で、富士山の朝・昼・夕の変化、四季の移ろい、その美しさが毎日の感動をもたらしてくれる富士山について述べつつ、その足元で目にとまるゴミの惨状に対して、「何とかできないものかと考え続けていて、やっと、この本が実現しました。一人ひとりが、自分で出したゴミは持ち帰る。これを守ってくれれば、美しい富士山を次代へ手渡せます。」と書き記している。絵本の終わりの方のページには、富士山の森に棲む動物たちや富士山の美しい風景の写真と共に、湖畔や森に捨てられたゴミの写真が掲載されている。世界遺産に登録された美しい富士山を次世代に残すこと、それが『富士山とひめねずみのチロ』という絵本の伝えるメッセージである。

『だるまちゃんとてんぐちゃん』（福音館書店、一九六七年十一月）や『からすのパンやさん』（偕成社、一九七三年九月）のシリーズで知られ、工学博士でもある加古里子（かこさとし）がつくった『富士山大ぼくはつ』は、火山である富士山の歴史を科学的に説明し、その誕生から未来の展望までを示した科学絵本である。加古は、富士山が多くの人に親しまれる理由として、（１）「あたりにほかの山がなく、ひとつだけくっきりそびえた高い山である」、（２）「なだらかにひろがったすそ野とともに、人びとの心をはれやかにし、そしてはげますひろくて大きい山である」、（３）「つりあいのとれたきれいな形と、朝夕、四季の光や色にはえるすがたの美しい山である」の三点から説明し、それは火山であることによると述べる。そして、その高く大きく美しい火山が、どうしてできたのかを、「富士山ができるまで」「富士山ができてから」「いまの富士山」「これからの富士山」の歴史上の観点から述べていく。

その始まりは、地球のできた四十五億年前から語り出され、地球の表面上の岩石やプレートのしくみ、七十万年前の日本列島に小御岳という火山ができて富士山のもとになったこと、一万年頃前に小御岳の上に古富士ができたこと、六千年前にその火口から新しい噴火が始まり、新富士という今の富士山のかたちを作られていったこと、その新しい富士山がときどき噴火し、千五百年頃には文や歌に残されるようになり、平安時代には「延暦の噴火」「貞観の噴火」が、江戸時代には「宝永の噴火」が起こったことが伝えられる。また、噴火のあらましだけではなく、富士山の溶岩

や風穴・氷穴のこと、天気と風や雲のこと、富士山の河と湖に棲む魚、植物とこん虫、動物や鳥のことが記されている。

富士山の噴火に対しては、次の三点が記され、注意を促している。(1) つぎの噴火は中央の火口により側火山でおこる。(2) 宝永の火山のように、ややばげしいばくはつをとみなう。(3) 交通、道路、用水、農業に大きな影響をおよぼす。最後には、現在は停止している富士山の噴火活動が再び起こる可能性もあり、私たちは今後も富士山のことを調べ、大自然の不思議を勉強することの大切さが伝えられている。

『富士山大ばくはつ』は、「第四十六回青少年読書感想文全国コンクール課題図書」に選定され、「第三十四回造本装幀コンクール展読書推進運動協議会賞」を受賞した絵本である。この絵本の中で、富士山はまだ「わかい火山」であることが指摘されているが、その意味に思いをはせるならば、自然を取りまく大きな歴史の中に私たちが生きていることの意味や、個々の時間の捉え方も自ずと変わって来るのではないか。富士山の理解に留まらず、地球の歴史や自然の不思議さに子どもたちの目を向けさせる上でも、この絵本は今後も重要な役割を果たすように思われる。表紙のカバーを広げると、真っ赤な空を背景に、富士山が大噴火している迫力のある絵が現前に現われる。六年の歳月を費やされて創られた絵本の一つひとつのページには、緻密で厳格な自然に対する考察が展開され、科学図鑑のように、子どもたちは興味の幅を広げることができるように思われる。何よりも絵本の可能性を信じて、子どもたちに本の素晴らしさを伝えようとする、作者「かこさとし」の熱い思いが感じられる絵本である。

4、富士山に登ることを誘う絵本

「富士山にのぼる」という同じ題名が本につけられた(C)の分類の三冊の絵本は、実際に登山を目的として、富士山に登っていく行程で見えてくるものや風景、富士山に登るために必要な事から等が描かれた絵本である。そうした意味では、(A)のような物語性には乏しく、(B)のように富士山の環境問題や火山の噴火のしくみなどを伝えるものではないが、実際に富士山に登ることの楽しさや厳しさを伝えてくれる絵本である。福音館書店が刊行した、菅原久夫と岡部一彦の『富士山にのぼる』も、富士山の麓から人びとが登山をしていく過程で見えてくる風景を繊細なタッチで描写し、登山に必要な知識を与えてくれる良い絵本であるが、ここでは、二〇〇九年、二〇一三年に出版された、写真家の石川直樹『富士山にのぼる』と、三上葉『トムとジェリーのたびのえほん・日本 富士山にのぼる』の二冊に絞って紹介したい。

石川の『富士山にのぼる』は、登山家で写真家でもある著者が、一九歳の時から繰り返し登り続けてきた富士山に対する思いを子どもたちに伝えることを目的として、創り出された写真絵本である。絵本の帯には、「この絵本を、子どものときの自分にもおくりたいと思います。山のぼりにあこがれていた、あのころの自分に一」と記されている。子どものときに登山に憧れ、恐れと向かい合いながらも、勇気をもって一步をふみだすことができたその出発点に、何度でも立ち返ることの

大切さが、この絵本では伝えられているように思われる。エベレストを初めとする数々の登頂を成し遂げて来た、著者の富士山に対する原点の思いが伝わってくる。その意味で、登頂する過程の場面ごとに、カメラに収められた著者の撮影した写真は、既に保存されたものではあるが、その時々登山の現場においては、それは常に一回性のものであり、何度でも山登りの原点に立ち返ることの緊迫感を呼び起こすものとなっている。

遠くから見える雄大な富士山の写真から始まるこの絵本は、徐々にカメラが富士山に肉薄していき、「とおくから見ていただけじゃ、つまらない。冬のある日、ぼくは富士山にのぼることにした」との決意のもと、「すこしずつ、すこしずつ、のぼっていく」ときに聞こえる「ザクッ ザクッ……、キシッ キシッ……」という「ぼく」が雪山を歩く音とともに進んでいく。誰もいない雪の地面を踏みしめながら、さらに凍った雪の上を「ガシッ ガシッ ガシッ ガシッ……」と「すべらないように」「ゆっくりと、すこしずつ」、「ぼく」は歩いていかなければならない。「息は、はいて、はいて、すう。山にのぼるときは、はくことがだいじだ。息をなるべくはいてしまえば、しぜんに、息をすうことができる」とあるように、高い山に登る上での呼吸法と心構えを意識しながら、誰もいない雪の富士山を足音と自らの呼吸の音のみを聞きながら、「ぼく」は一人で前に進んでいく。

四時間後、日暮れになり、気温が下降して来た富士山の風景。寝泊りするためのテントをはり、きれいな雪を集めて、とかして水をつくり、その水を沸かして紅茶や食事をつくり、外では強い風がうなりを上げている中、あたたかな寝袋にもぐりこんで、眠りに就くまでの興味深い写真が載せられている。時々、風の音で目を覚まし、富士山のふもとに広がる森のことを考える僕の意識と重ね合わせるように、広々と広がる「青木ヶ原」＝「樹海」の原始の森の風景や、森の中で湧き出す水、「氷穴」や「風穴」の写真が映し出される。「青木ヶ原には、富士山とともに、神聖な空気がみちている」という言葉とともにある緑の森の写真や、「いま富士山のうえで眠っているのは、ぼく一人だけだ。」「心がぴりぴりしてくる、宇宙が、すぐ手のとどきそうなところにある。」という言葉の背に広がる夜空の星々の写真は、言葉だけでは表現できない美しさがある。

眠りから覚めた翌朝のオレンジ色の朝焼けの風景の写真を経て、「足あとひとつない真っ白な山肌へ、ぼくはまた、ふみ出した」とページは続く。荒れ狂うような風に吹きつけられながら、頂上を目指すものは、とにかく足を前に出すしかない。だが、雪山の写真に挟まれたページには、一呼吸を置くように、赤黒い溶岩の肌でおおわれた夏の富士山の穏やかな写真や、富士山の大地の上の小さな直物にも目を向けられた凜とした写真が紹介される。「オンタデやフジハタザオなどの植物は、木が育つことができなくなるほどの高くきびしい場所でも、たくましく、その根をはって生きている」ことが伝えられる。

こうして、著者の「ぼく」のカメラ・アイを通して、一步一步に登り進んできた視界の前に、富士山の頂上が見えてくる。登りきった富士山の頂上からは、はるか下に、小さな町が見える。富士山の頂点に立った「ぼく」は、地上の誰からも見えない場所にいる。ここには、ひとりで、自分の足で、歩いてきた著者の感慨深い思いが見て取れる。「見ていただけじゃわからない」富士山。「足と手と目と息と耳と、体中で、富士山にさわりながら、また、富士山にのぼろう」「そこにのぼれ

ば、かならず、新しい世界にであうことができる」「見なれた姿の中に、知らないことがたくさんあることに、ぼくは気がついた」という文章と共にある雪の富士山の写真のページの後には、再び強い風に身をまかせて、一步をふみだしていく「ぼく」の姿が映し出され、絵本は終わられる。石川の『富士山にのぼる』は、鮮明な写真によって、遠くから眺めているだけでは見えない富士山の風景を伝える役割を果たしているが、それは同時に、未来を担う子どもたちに対して、未知の世界に向って、一步一步を自らの足で歩み、進んでいくことの大切さと勇気をもたらしてくれる絵本であると思われる。「なにかわくわくすることがはじまる出発の山」（あとがき）、それが著者にとっての富士山の魅力である。

三上葉・作画の『トムとジェリーのたびのえほん・日本 富士山にのぼる』は、二〇一三年六月に富士山が世界文化遺産に認定されたことを受けて、同年の八月に出版された絵本である。また、アメリカで誕生したトムとジェリーのキャラクターを使って、子どもを学習へと導いていく河出書房新社の「わかったシリーズ」の本の一冊でもある。ページの内容がマンガのコマ割りのように細かく分割されていることから、集団の子どもに読み聞かせをするには適さない絵本であり、加えてキャラクター物を敬遠する保育現場や学校もあることから、保育や教育の現場で扱うのは難しい側面がある絵本であるようにも思われる。

しかし、そうしたことを差し引いて、親子で一緒に、あるいは小学生以降の児童が富士山のことを学ぶために手にする入門書としては、豊富な情報が独自の観点で提示されており、視覚的にも楽しめる絵本であることも確かである。日本にやってきたトムとジェリーが最初に訪れるところが、日本の銭湯であり、その銭湯の壁に富士山の絵が描かれているところから、富士山への導きが始まるのは面白い。富士山に登るために必要なものが絵で示されながら、それらがトムとジェリーのリュックに詰められ、可愛らしいリスや動物たちの導きで、「ケモノみち」を利用した登山が始まる。富士山の高さごとに棲む動物の紹介、富士山の標高の高さ、日本で初めて聖徳太子が富士山に登ったという伝説、葛飾北斎の「富嶽三十六景」の絵、四季を彩る富士山の風景の美しさ、富士山にまつわる天狗伝説、高山植物の種類などが伝えられ、「かこさとし」の『富士山大ぼくはつ』のように自然に対する緻密な観点からの見聞は少ないが、富士山に関する絵画や伝説など、富士山の文化的な側面に触れている点は評価されるべきものだと思う。

終り近くの見開き二ページにまたがった、トムとジェリーが目にする、日の出とともにある富士山の光景の絵は、美しい輝きを放っている。絵本の最後には、「あたまをくもの上にだし 四ほうの山を見おろして かみなりさまを下にきく 富士はにっぽん一の山」という、巖谷小波の『ふじの山』の歌詞が掲載されている点にも注目したい。末尾には、「富士山について（おうちのかたへ）」というあとがきが付され、第一七番目の世界遺産となった富士山は、「信仰」「芸術」「景観」の三つの普遍的価値を基準として、最終的には二五の構成資産を含んで確定されたことの説明がなされている。古来より神聖な場所として崇められてきた富士山は、「山頂で『ご来光（日の出）』を拝み、火口周辺を巡る『お鉢めぐり』など、信仰登山は形をかえて現在に受け継がれて」いることが記される。

また、富士山が、「数多くの絵画、文学、演劇作品などの題材となり、日本人の精神と生活に、大きな影響を与えてきた」ことが語られている。江戸時代の葛飾北斎の「富嶽三十六景」や安藤広重の「東海道五十三次」では、数多くの富士山が描かれ、詩歌では、「万葉集」や「古今集」等でも、富士山は多く歌われていることも書き留められている。一見するとキャラクターに任せて富士山を紹介するだけに見えてしまう絵本だが、「八面玲瓏のその姿と自然環境を、いつまでも変わることなく、後世に伝えていくことが、私たちの課題です」とあるように、絵本を通して、子どもたちに、富士山の文化的価値を伝えていくことへの高い志が、この絵本の製作者の言葉からはうかがえる。それは、様々な工夫を凝らして製作される絵本という媒体が、未来を担う子どもたちにとって、いかに大切な指針となる可能性を秘めているのかを示しているようにも思われる。

5、富士山を通して、言葉の美しさや言葉の力を伝える絵本

最後には、富士山をモチーフにしながら、日本語の言葉の美しさや言葉そのものの持つ力を伝えようとする（D）の分類の絵本について紹介したい。

「1、はじめに」の章で、谷川俊太郎と佐野洋子による詩集絵本『ふじさんとおひさま』については述べたので詳細は省くが、言葉を凝縮させることで、言葉本来の美しさと力を最も端的に表現する文学のジャンルとして、詩歌が上げられる。歌人の俵万智とグラフィックデザイナーのU・G・サトーが製作した『富士山うたごよみ』は、U・G・サトーの富士山の絵に、俵が発表した短歌を子ども向けに選び合わせ、新たに俵の文章を書き加えることで、短歌と絵を融合させた斬新な試みの絵本である。絵本には、「立春」から「大寒」までの季節の「こよみ」に合わせて、二十四の短歌と文章、二十四の異なった様相を見せる富士山の絵（イラスト）が掲載されている。U・G・サトー氏の描く富士山は、例えば、ティッシュの箱から浮き出たティッシュペーパーの富士山、花に水を撒くじょうろの富士山、蝶を取る網の富士山、干された洗濯物の富士山、空き缶の富士山、紅葉の欠けた部分が模様となった富士山、温泉の湯に映る富士山、サンタクロースが座っている富士山、コーヒーカップのデザインとなった富士山など、実に多彩なアイディアと色彩と形で表現された富士山の絵が次ぎ次ぎと現われ、それぞれのページを辿るだけでも十分に楽しめる絵本となっている。

一例を紹介するならば、冒頭の「立春」のページには、「春一番のおもいよ届け 青空はあなたに続く色の階段」の短歌が掲載され、頂上に降り積もる白い雪のかたちと富士山の青色の絵が、背景の空の色とも対比を成し、晴れ晴れとした清清しさをもたらしめている。短歌の両脇には、「立春

二月四日頃 春のはじまりです。さあ、春になりますよと知らせるように吹く南寄りの強い風を、春一番と呼びます」という立春の説明があり、「遠く離れている人のことを思うときは、空を見上げてみよう。キミの頭の上の空は、その人の頭の上の空と、つながっているんだよ。いま吹いた風、明日はだれのところに遊びにいくんだろうね」という短歌の解説が付される。「夏至」では、「はなび花火そこに光を見る人と闇を見る人いて並びおり」の短歌と共に、闇夜の中にある黒い富士山の

頭上に「西瓜」「向日葵」「紫陽花」の花火が打ち上げられている絵が描かれる。歌集『サラダ記念日』（河出書房新社、一九八八年三月）の代表作、『この味がいいね』と君が言ったから七月六日はサラダ記念日』も「小暑」の項にあり、サラダやドレッシングらしい小瓶が載せられた水色模様の富士山にスプーンとフォークが置かれ、その上に赤い帽子が描かれた独特の絵が記載されている。俵の短歌の分析にまでは踏み込まないが、詩歌の言葉は普段の生活では見ることができていないものを、新たに私たちの前に提示する。言葉が読み手の思い込みを打ち壊し、言葉を通して、私たちが見ているものは、それぞれの目に映った光であり、闇であることが伝えられる。

『富士山うたごよみ』の絵本のカバーには、児童文学者・松居直の次のような文章が記されている。「目に見えないことばが、目に見えない心を動かし、人を生かします。命もことばで働き、愛もことばで感じます。気持ちをことばにできたとき、また絵をことばで唄いあげたとき、ことばは生きる力です。」「これは絵とことばと友達になる絵本、くらしを楽しくすることばの湧き出る絵本です。この絵本を手にするとは、ことばの泉を手にするのです」。もちろん短歌の内容は、幼児や子ども向けのものとは決して言えないが、U・G・サトーの変幻自在な富士山の絵は、それぞれの年齢や子どもに応じて、「目に見えないことば」の魅力をも伝えるものになっていると思われる。子どもから大人まで楽しめる絵本である。

6、おわりに

以上、見てきたように、一九九〇年代以降に出版された富士山に関する主な絵本では、大きくは、(A)～(D)の四つの方向性の分類が可能であることが見て取れた。

改めて、(A)～(D)が、子どもたちに何を伝えようとしているのかを確認してみるならば、

- (A) 富士山を擬人化することで、子どもたちにお話（物語）を伝えようとする絵本。
- (B) 富士山の自然環境の問題や火山噴火の問題を、子どもたちに伝えようとする絵本。
- (C) 富士山に登っていく行程で見えてくるものや、自然の様子を伝えようとする絵本。
- (D) 富士山をモチーフにしながらも、詩歌を通して言葉の力を伝えようとする絵本。

ということになろう。

もちろん、それぞれの絵本は独立した作品であるが、美しくも力強く、雄大で人の心を励ましてくれる富士山の共通するイメージが、個々の絵本の土台を支えていることも確かであろう。詩の中の大きく静かな富士山も、家族を愛する心を持った富士山も、相撲を取る富士山も、大噴火を起こす可能性のある富士山も、頂上を目指して登りつめていく中で新たに発見される富士山も、たとえその森の中が汚れてしまっている現状にある富士山でさえも、日本人の私たちの中には、共通する美しくも雄大な富士山の姿が存在し、それを維持していこうとする願いの気持ちが共有されているのである。

したがって、富士山を題材とした絵本が、子どもたちに本当に伝えようとしていることは、富士山を通して、新たに発見される、美しくも力強く、勇気をもって人生を生きていくための広く大きな「ところ」であるということができよう。富士山の歴史や自然の姿、富士山を描いた絵画や詩歌等を鑑賞し、学ぶことは、子どもたちはもとより、私たちの「ところ」について学ぶことに通じていくはずである。それはまた、絵本という文化、文字による「ことば」の可能性を、絵本を読む子どもたちの姿を通して、子どもたちと共に、考え続けていく必要があることを意味する。

絵本について考察することは、先の松居直の文章を借りれば、実体がない筈の「目に見えないことば」が、「目に見えない心」を動かし、「人」をも生かすことの謎に迫ることであり、「命もことば」で働き、「愛もことば」で感じるという、その「ことば」それ自体の持つ働きについて考えることでもある。結語は難しくなってしまったが、稿を改めて考察してみたい。

